

## 芸術の双翼 ―共感と啓発のはざまに―

芸術には二つの側面があると思う。

一つは内側にある感情との再会としての「共感」、そしてもう一つは外側からの新しい視座との出会いである「啓発」だ。

これは、もっぱら鑑賞者として芸術と向き合う私自身の経験から導いた考えである。

私は芸術が好きだ。文学も音楽も映画も好きだ。なかでも特に惹かれ、深く接してきたのは美術である。

美術館に足を運んだり、美術書を読んだりすることで新たな作品と出会う。その過程そのものが私にとって一つの生きる喜びになっている。

だからこそこでは、芸術の中でも最も自分に身近な美術を中心に語っていきたい。

とはいえ私は、これから述べることは他の芸術にも広く通じるものであると信じている。

美術鑑賞というと、世間ではどこか高尚なものとして扱われがちだ。

「大人な趣味だね」「そんな文化的で頭の良さそうな趣味があるなんて羨ましい」と言われたことも一度や二度ではない。そう言われるたび、私は少し戸惑う。どう返せば良いのか、何がそんなに特別なのか、正直分からない。

私にとって美術はもっと単純で素朴なものだ。

もちろん、時代背景や技法を学ぶことでその作品に対する理解が深まることはある。

そういった学問的な部分を含む場合があることが、美術が難解だと思われる一因なのだろう。だが、それはあくまで知識の問題であり、調べれば誰にでも手に入るものだ。

もっと本質的なのは、作品と自分の間に生まれる「感覚」のやり取りであると思う。

「美術ってよく分からないんだよね」。こういう人もいる。

きっとこれは、世間で評価されているものを自分も同じように良いと思えないことへの戸惑いから来るものだ。

しかし本来、美術は「好き」「嫌い」を自由に感じて良いものである。

好きも嫌いもなくても、それもまた一つの自然な反応であり、無理に価値を見出す必要はない。

私たちは美術に対してもっと自由であっていい。

冒頭で述べたように、私は芸術の価値を「共感」と「啓発」の二つに見ている。

まず「共感」とは、作品を通して自分自身の感情に再会する体験だ。

作中で展開された世界観、作者の表現、作品が表す心情などに対する共感。

私たちは日々さまざまな気持ちを抱いている。しかしその感興のすべてを表現することはできない。あるいはしたいとも思わない。

そうやって表現されずに不明瞭なまま残った「何か」が、ある作品を見たときにふと形を持って現れることがある。そしてその瞬間、人々は抱えていた思いから解放されるのだ。

これを私は芸術作品に対する「共感」だと捉える。

あの時感じたあの感情はこんな風に形にできるのか――。

この大きな感動は何にも代えがたい。

自分の内側を漂う漠然とした何かが芸術作品という形をとって現れた時、私たちが捉えている世界の輪郭はより明瞭なものとなる。

自分が表現できなかった美しさ、苦しさ、壮大さ。

世の中に無数に転がるこれらの消化しきれなかったものたちを、芸術は驚くほどの確に表してくれる。

だからこそ、人間はそこに自然と救いを求め、畏怖の感情を抱くのだ。

私がそう考えるきっかけとなった一枚の絵がある。エドワード・ホッパーの《ナイトホークス》だ。

私は昔から「都会的なもの」に言葉にならない好意を抱いていたが、ずっとその正体がよく分からずにいた。

《ナイトホークス》に出会ったとき、私ははじめて「ああ、自分はこの感じが好きだったのか」と気づいた。

都会の深夜。干渉しすぎずクールで、それなのに孤独で、どこか強がりだ。

ホッパーの描く風景には、いわゆる「都会」にあるような他人への無関心というイメージと同時に、やはり都会には人がたくさん集まるからだろうか、そこには濃縮された人間臭さが同居している。登場人物たちは自分自身にしか気を配っていないようでいて、誰かを見つめているようでもある。

私はその矛盾と、そこから来る一種の緊張感に惹かれていたのだった。

こんなに的確に、しかも美しいかたちで自分の気持ちが絵になっていたことに驚き、喜んだ。あの瞬間のことは今でも忘れられない。

このように、芸術による「共感」は自己との再会である。

もう一つの「啓発」は、「共感」の対となる体験だと思う。  
つまりは、自分の世界を揺さぶる新しい何かとの出会いである。

例えば抽象画などはその最たる例だ。  
何を描いているのかさえ分からないのに、絶大なインパクトを持つ。  
それを目にした瞬間、「自分はこんな風に世界を捉えたことが一度でもあったらどうか？」  
「愛や悲しみをこんな風に感じたことがあったらどうか？」と自問せざるを得なくなる。  
作品を通して、多くのことに気付かされる。未知との遭遇によって自分の視野が広がっていく。

もちろん、風俗画から当時の暮らしを知ったり、現代アートを通じて社会問題への意識を高めたりすることもある。  
でもそれ以上に、自分と異なる価値観や視座を目の前に提示してくれること——これが芸術の大きな力であると思う。

スペイン絵画の巨匠であるジョアン・ミロはこう言った。  
「芸術家とは、ほかの人々が沈黙する中で何かを伝えるために声を上げる者であり、その声は無駄なものではなく、人々を助けることを証明する義務を負うものである」。

芸術が沈黙を破り、社会の中で声を上げにくい存在の代弁者となることを示しているこの言葉は、芸術が持つ啓発の力を象徴している。  
作品が目の前に突きつける「他者のまなざし」は、鑑賞者の無関心や固定観念を揺さぶり、私たちを知らなかった現実と向き合わせるのだ。  
ミロの言葉は、芸術が単なる美しさを越えて、社会的・人間的な真実を可視化する力を持つことを教えてくれる。

必ずしも「他の価値観」のすべてを理解する必要はない。  
ただ、そこに知らない他者の視点や知らない世界があるという事実こそ私たちにとって大切なのだ。  
芸術による「啓発」は、全く想像も付かなかった立場や新しい状況と対峙する機会として機能し、凝り固まった頭を柔らかく、狭まった視野を広くしてくれる。

では、このような「共感」と「啓発」を鑑賞者に与えてくれる芸術は一体どんな意義を持つのか。  
それは、複雑化した現代における孤独を解消し、他者との相互理解のきっかけとなることで

ある。

芸術は、多様で複雑なこの社会の中に、「こんなふうに見ている人がある」「こんな気持ちで生きている人がある」という形を与えてくれる。

それがとても正確で美しいからこそ、私たちは共感し、啓発される。

もっと言えば、芸術は他者との間に橋を架け、自分自身の生の輪郭を明確にしてくれる存在なのだ。

だから私たちはそこから誰かの目で世界を見てみることを学び、自分の感情も他者の感情もここに存在して良いのだと確認できる。

その気づきは孤独から解き放たれる契機となるのと同時に、自分の価値観も他者の価値観も同様に尊重することを私たちに求め、多様な他者との共存を促す。

アートは人々に「共感」と「啓発」を与えることで人々の孤立感を軽減し、他者との融和の一助となる。だからこそ、分断が進む現代社会の中で、芸術は今まで以上に大きな意義を持つのだ。